

中央アジアの旅 2024



2024年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

中央アジアにあるウズベキスタンとタジキスタンに行ってきた。今回の旅は、私と友人夫婦の3人で旅行会社のツアーに参加して、青の都と呼ばれるサマルカンドをはじめ、中央アジアの歴史文化あふれる都市を巡ってきた。

第一章 中央アジアへ

■中央アジアへ

私は幼い頃より“シルクロード”という言葉に憧れを抱いていた。そしていつかは行ってみたいと思っていたが、今回その夢を実現する機会がやってきた。

シルクロードとは、紀元前2世紀頃から15世紀頃までアジアとヨーロッパの交流の中心的な役割を果たした交易路で、道というよりも都市が点在しているものだった。また、シルクロードという言葉も当時からあったものではなく、19世紀にドイツの学者が用いた造語である。

砂漠に点在する都市遺跡を訪ねることになる今回の旅は個人旅行では行き難く、旅行会社のツアーを使った。当初は私と妻、そして私の友人の山さん夫妻の4人で参加する訳だったが、妻の都合がつかなくなり、私は一人参加になった。山さんの奥さん、つまり山奥さんもシルクロードへの憧れが強く、その熱量は相当なものと言っていいだろう。何しろ今回の旅行は山さんよりも山奥さんの方が乗り気になって主導権を握っている。

そのような人たちが14人集まったツアーは美人添乗員の引率で、成田空港から始まる。

中央アジア5カ国と呼ばれる国々の中でも、シルクロードの中心的な都市はウズベキスタンに点在しており、旅の行程はそのウズベキスタンを中心に隣国のタジキスタンも訪れるように組まれている。



【中央アジア】

中央アジア 5 カ国の残りの 3 カ国とはカザフスタン、トルクメニスタン、キルギスで、何故かキルギスだけ“スタン”が付いていないが、実は正式国名はキルギスタンなので全てスタンが付いている。

スタンとはペルシャ語で○○の土地、○○の国を意味しており、このことからこの地域はペルシャの支配下もしくは影響下にあった。ちなみにペルシャは、現在のイランにほぼ等しい。

■おかしな飛行ルート

私たちは日本からウズベキスタン航空の直行便に乗り、首都タシケントまで 9 時間のフライトを楽しんでいる。

座席のパネルには Google map のような地図アプリがあって、画面には飛行ルートが表示される。最短距離ならば日本から北朝鮮、中国、モンゴル、そして再び中国の上空を飛ぶのだが、北朝鮮もモンゴルも避けて飛んでいる。

このようなルートを飛ぶ理由について、私は隣に座っている山さんとあれこれ意見を交わし始める。国際社会から孤立している北朝鮮はともかくも、モンゴルを避ける理由は上空通過料が高いからだという意見で一致する。上空通過料とは、その国の上空を通過するだけで料金を払わないといけないもので、国によって料金が異なる。察するにモンゴルはそれが高いのだろう。

このような迂回ルートはここだけではない。最近ロシアによるウクライナ侵攻により、航空各社はロシア上空を飛ばないようにしている。

例えば ANA の東京～ロンドン便は、東京発が北極上空を飛び、ロンドン発がトルコやカザフスタン、中国上空を飛んでいる。そのためフライト時間は、以前のロシア上空を飛ぶルートに比べて 2～3 時間も増えて 14 時間以上になっている。これにより燃料も増えて、結果として運賃も値上がりしている。

この地図アプリは実に面白い。私も山さんも夢中になって日本各地、世界各地を地図で調べはじめて、「この島は良かった」とか、「今度はこの国のこの街に行きたい」とか話しながら画面を操作する。中年おじさんたちの良いおもちゃと化して、存分に楽しませてもらった。

■ウズベキスタン到着

現地時間の夕方、ウズベキスタンの首都タシケントに到着する。

出迎えてくれたのは大型バスと現地の女性ガイドのナルさん、年の頃ならアラフォーだろうか。流暢な日本語を話す。

ここからツアー客 14 人と添乗員、ナルさん、バスの運転手を加えて 17 人の旅が始まる。

早速ホテルにチェックインして夕食になる。私と山さんはビールを注文し、今回の旅の安全と成功を期して乾杯する。初めてのウズベキスタン料理は香辛料や脂もさほど気にならず、比較的日本人の口に合うようだ。

かくして旅の初日は無事に終える。

旅の 2 日目、私は朝早く目が覚める。4 時にモーニングコールを頼んであると聞いていたが、電話がなかなか鳴らない。

4 時を少し過ぎてドアをノックする音が聞こえる。ドアを開けると昨夜ホテルのフロントにいた若くてキュートな女性スタッフが立っていて、笑顔で「アッサロム アライクム」と言っている。どうやら現地語で「おはよう」という意味らしい。

かくしてさわやかな気持ちでウズベキスタンの朝を迎える。

■強者（つわもの）に驚く

朝早く国内線の飛行機に乗り、最初の目的地「ヒヴァ」に向かう。機内で私たちと違うツアーの客であろう日本人おばさんが私の隣に座り、話し掛けてくる。彼女は秘境巡りで有名な西遊旅行のツアーで 23 日間かけて中央アジア 5 カ国を巡っており、その途中だという。

今まで巡ってきた中央アジアの国の話を聞く。あのタリバンが支配するアフガニスタンとの国境付近はフリーエリアになっていたとか、どこの遺跡に行っても日干しレンガで出来ているから、半分壊れた泥の遺跡だと話してくれる。

このおばさんは世界各国の秘境を巡っているようなので、感動した場所を聞いてみると、モンゴルの“初日の出ツアー”が良かったと話をはじめ。

大晦日の夜、ウランバートル市内では花火が上がり、市長が乾杯の音頭をとって年越し祭りが盛大に始まる。そして初日の出を見るためにシベリア鉄道に乗ると、車内ではスパークリングワインが振る舞われて、雪の草原で初日の出を見ながら -30℃の世界で新年を祝う。

私も昨年モンゴルに行ったが、冬はとにかく寒いと聞いていた。彼女は「是非年越しに行つてね。感動の連続ですよ」と自信たっぷりと応えてくれた。この自信たっぷりの言葉に人は結構動かされる。

第二章 ヒヴァ (Xiva)

■ホテル団地

ヒヴァの空港に到着し、ヒヴァ駅近くのホテルにやって来る。このホテルの場所が面白い。

駅前に噴水があって、そこから大きな道路が続き両側に中型ホテルがたくさん集まっている。いわば“ホテルの団地”で、駅前なので観光客にとっては便利な場所にある。ホテルにとっても立地条件が同じなのでホテル本来のサービスで勝負できる。

私も色々なホテルに泊まってきたが、このようなホテル団地は初めて経験する。ウズベキスタンが国をあげて観光に力を入れていると聞いていたが、まさしくそれを象徴している。



【ホテル団地の中央通路 手前は噴水で水は出ていない】

■城塞都市ヒヴァ

世界遺産「ヒヴァのイチャン・カラ」は城壁都市で、元は二重城壁都市だった。現在は内側の城壁だけになっており、城壁の内部に古い街が残っている。

西門から城壁都市の内部に入ると、色鮮やかなタイルで造られたミナレット（尖塔）がある。このミナレットは未完成品で土台部分と下の部分しかない。それでも 29m もある。

本来は別の名前があったのだろうが、今は「カルタ・ミナレット」と呼ばれている。カルタとは現地語で短いという意味なので、見てのとおり表現と言っている。

当時のヒヴァの王は隣の都市ブハラに対抗意識を燃やしていた。そのためブハラのミナレットよりも大きいミナレットをヒヴァに建てようとした。計画時は 95m の高さだったが、建築中に王が亡くなり、工事は打ち切りになって未完成の状態が残った。もしも完成していたらきっと王の名のミナレットになっていたに違いない。

何事も途中で止めると、ろくなことにならない。



【カルタ・ミナレット】

未完成のミナレットの他に、ハーレム、メドレセ（神学校）、モスク、宮殿、牢獄、造幣所、奴隷市場などを見物する。城壁に囲まれた都市なので何でも揃っている。そしてどの建物も素晴らしいイスラム建築で、ツアー客たちは写真を撮りまくっている。



【夏の宮殿 クフナ・アルク】



【ジュマ・モスク】



【メドレセ（神学校）】



【ハーレム】

ハーレムとは、日本流の言い方をすれば“大奥”で、イスラム教は一夫多妻なので宮殿には王の部屋と4人の王妃の部屋があり、それ以外に多数の妾（めかけ）が住む大部屋もある。

一度でいいからこんな生活をしてみたいと、山さんが山奥さんに気付かれぬように小声で言っている。すると他の男性ツアー客も大きくなずいている。

牢獄は人形を置いて当時を再現している。別の部屋ではいくつかの処刑シーンの絵が飾ってある。例えばミナレットの上から囚人を投げるシーン、手足を縛って土の中に首から下を埋めるシーン、さらには浮気をした女性囚人を数匹の猫と一緒に袋に入れるシーンもある。袋の上から猫を叩くと猫が必死で爪を立てて囚人をひっかき、とてつもない拷問になるという。どれも凄まじい。

城壁には見張り台がある。その見張り台に登ると、城壁内と城壁外を見渡すことができる。この眺めがまた素晴らしい。

街の中は意外に日本人観光客が多い。そのためか店先では日本語が通じて、とてもフレンドリーな対応をしてくれる。さすがに日本円は使えないが、現地通貨スム以外にUSドルも使える。

飛行機で臨席に座った23日間ツアーの元気おばさんにも再会し、情報交換する。

■ 昼食

昼食になり、生ビールがあるというので注文する。10月とはいえ、暑いので生ビールは最高に美味しい。

最初に出てきた野菜の付け合わせがビールのつまみになる。その後のスープもなかなかいける。メインは「シュヴィット・オシュ」と呼ばれている緑色の麺の料理で、ウズベキスタンでもこの地域だけの料理だという。日本の茶そばに似ているが、味はもちろん違う。



【野菜の付け合わせとスープとビール】



【シュヴィット・オシュ】

■ 45m のミナレットに登る

「イスラム・ホジャのミナレット」は高さ 45m もあり、この街で最も高い。牢獄の絵でミナレットから囚人を投げるシーンがあったが、おそらくこのミナレットだろう。

当初、私はそのミナレットに登る気はなかったが、23日ツアーのおばさんがこのミナレットに登って、これもまた自信たっぷりに「とても良かったよ」と言っていたので、私も登ることにした。人はこの自信たっぷりの言葉に弱い。

そして入場料 10 万スムを支払う。10 万スムと聞くと驚くが、日本円で約 1160 円になる。

ミナレット内部の階段は 118 段もあり、狭くて急になっている。そのためハシゴのように両手足を使って登る。降りる人とのすれ違いも大変で、気を抜けない。もしも誰かが足を踏み外して落ちれば、下にいる全員が下まで落ちて、重症もしくは死を覚悟しないとイケない。

なんとか登り終えて頂上にでる。頂上のスペースは狭いので、そこにいた何人かが、私が登り終えたのを待って降り始める。



【イスラム・ホジャのミナレット】

外を覗くと青いドームの建物「パフラヴァン・マフムド廟」があり、未完成のカルタ・ミナレットも見える。先ほど登った見張り台よりも高いので、遠くまで見渡せる。しかしながら晴れているのに何となく霞んでおり、あまり綺麗に見えない。砂漠地帯なのでおそらく砂が舞っているのだろう。



【ミナレットの上からの景色 左奥にカルタ・ミナレット】

頂上に 1 人残っている若者と話をする。彼はルーマニアから来たと言うので、私もルーマニアに行ったことがあると話始める。ドラキュラが面白かったので、それを旅行記に書き、さらに本を出版したと言うと、彼は「Really?」、そして「Wonderful!」と感激している。

さて、先ほど牢獄の絵にあったようにこのミナレットの上から囚人を投げるとなると、ここまでどうやって連れてくるのかという大きな疑問が残る。階段で暴れられると困るので、ミナレットの外壁からロープを吊るして引っ張り上げたのかもしれない。

それにしてもミナレットにそんな利用方法があったなどと夢にも思わなかった。

■夕食

ヒヴァ市内の洒落たレストランで夕食になる。今回も最初に野菜の付け合わせにスープが出てくる。どうやらこれがこの地方の定番らしい。

そして「サムサ」と呼ばれる肉詰めパンが出てくる。サムサは牛肉やカボチャの餡を小麦の生地で包んで熱したもので、インドのサモサに似ている。ただしインドでは豆やイモなどが入っていて宗教上の理由から牛肉は入れないから、味としてはこちらの方が美味しい。

さらに肉料理が出てくる。肉は牛肉で、ひき肉のつくねのようなものと、一口大に切った肉、それにライスとポテトも付いている。

全体的に辛くも脂っぽくもない。塩コショウの味付けで比較的あっさりしている。



【サムサと肉料理】

ラッキーなことに別の団体客が流しの音楽隊を呼んだので、生演奏を聴きながらの食事になる。その音楽は西洋と東洋が融合しているようだ。



【レストランの内部 流しの音楽隊】

■遺跡のライトアップ

夕食後に街を散歩する。

ウズベキスタンは観光に力をいれており、モスクやミナレットはライトアップされて、多くの人々が街に出ている。

昼間はあまりにも暑いから、夜の活動が多くなるようだ。街は昼間とは全く違う顔をして、私たちを迎えてくれる。



【ヒヴァの夜】

帰り道はホテルのカートが迎えに来てくれた。ゴルフ場のカートを長くして座席を増やしたような乗り物で、12人乗りだが、詰めあって16人が乗ってホテルへ戻る。

日本では法に触れるのでこんなことはしないが、ここでは柔軟な対応が優先するようだ。

第三章 ブハラ (Bukhara)

■砂漠の国

本日は次の目的地「ブハラ」まで約 400km のバス移動の日になる。

街をぬけて郊外に出ると、ガイドのナルさんが「橋を渡ると砂漠になります。橋は一方通行で、さらに鉄道と共有なので線路も敷かれている珍しい造りをしているから見てください」と言っている。確かに面白い造りをしている。鉄道と道路が共存する橋などというものは日本では見ることができない。

橋を渡ると間もなく砂漠になる。キジルタム砂漠で、この砂漠がウズベキスタンの国土の 6 割を占めているという。



【線路が敷かれている道路兼鉄道橋】

延々と砂漠が続く。シルクロードといってもそのような道があったのではなく、基本的には砂漠地帯で、砂漠に点在するヒヴァやブハラのようなオアシス都市で休養をとり補給をして旅を続けた。

しかし現代は砂漠にも道路があり、多少ガタガタ道だが、舗装されている。砂漠なので山や川がないから、2 点間を結ぶ直線が最短距離になる。そのためただひたすら真っ直ぐに道が続いている。

そんな直線道路で砂漠ばかりの景色が続くので、ナルさんがウズベキスタンのことを話してくれる。

大陸の内陸性気候なので夏は 40℃、冬は氷点下になる。そのため観光客は夏と冬を避けて 3～5 月、9～11 月しか来ない。だからガイドの仕事も年間の半分しかないところぼしている。

主要産業は農業で、主要な穀物として小麦、大麦、トウモロコシ、玉ネギなどで、メロンやスイカも有名だという。青果は輸出していないが、ドライフルーツは輸出している。そしてこれらのものは全てバザールで売っているとのことだ。

肉は主に牛肉を食べ、羊肉も食べるが日常的には食べないという。

■イスマーイール廟

ブハラに入り、「イスマーイール廟」にやって来る。中央アジア最古のイスラム建築でサーマーン朝の王族が眠っている。13 世紀のモンゴル襲来の時には、廟は砂の中に埋もれていたために破壊を免れた。そして 20 世紀になって発掘された。

それにしてもこの大きな建物が砂に埋もれていたとは、にわかには信じ難い。日本とはスケール感が全く異なっている。

この廟は 892 年から約 50 年かけて建設された。1100 年を経ても廟の土台部分はしっかりと残っている。一辺約 10m の正方形の土台に、内径 8m のドームが載せられて、壁はレンガのみが使用され、レンガの凹凸を使用して複雑な陰影を表現している。

廟は外観と内装の両方の美しさによって宝石箱にも例えられており、月の光に照らされた姿が最も美しいと、ナルさんが教えてくれた。



【イスマーイール廟の外観と内部】

■民族舞踊を見ながら夕食

夕食会場に案内される。メドレセ（神学校）の庭を使ったレストランで民族舞踊のショーが開かれる。民族衣装を着た若い女性ダンサーが踊り、その後ろで男たちが楽器を演奏し、歌を歌っている。

ダンサーの踊りも衣装もどこかで見たことがあるというもので、バリ島などの東南アジアのようにも、中国のようにも、トルコのようにも、東ヨーロッパのようにも見える。

音楽もまた、西洋的にも東洋的にも聞こえるから不思議だ。弦楽器に打楽器、何となくどこかで見たもの、どこかで聴いた音がする。



【メドレセ（神学校）の庭を使ったレストラン】

ツアー客の誰かが「今のはスペインのフラメンコのような感じだね」と言うと、別の誰かは「インド音楽だよ」と言っている。ツアー客たちは東西入り組んだ“音楽の妙”に翻弄されている。

さすがにここはシルクロードのオアシス都市、東西の文化が交差している。

■世界遺産ブハラ

夕食を終えてブハラの歴史地区を訪れる。ここは1世紀頃からシルクロードの要衝として栄えはじめ、9～10世紀に最盛期を迎え、13世紀にモンゴル帝国に破壊されたが、その後復興して、ほぼ今の姿になった。そして19世紀に帝政ロシアに支配され、ロシア革命でソ連になり、ソ連崩壊でウズベキスタンが独立して今に至る。そして1993年に世界遺産に登録された。

それら歴史的建造物群がライトアップされており、目にもまばゆい。昨日見たヒヴァの比ではない。カラーンモスクのカラーン・ミナレットが実に美しい。ヒヴァの王が対抗心を燃やしたというのがこのミナレットらしいが、その王の気持ちもここに立つと分からないでもない。

さらにそのミナレットの隣に立つと、ミルアラブメドレセが目の前に広がる。2つの青いドームを背後にしてこの世のものと思えない美しさを放っている。



【右：カラーンモスクとカラーン・ミナレット 左：メドレセ】



【夜のミルアラブメドレセ】

翌日、旧市街を再度散策する。昨夜の夜景の方がどう見ても綺麗だったが、昼間のメドレセもなかなか捨てがたい。その比較のために昨夜と同じ構図で写真を撮った。

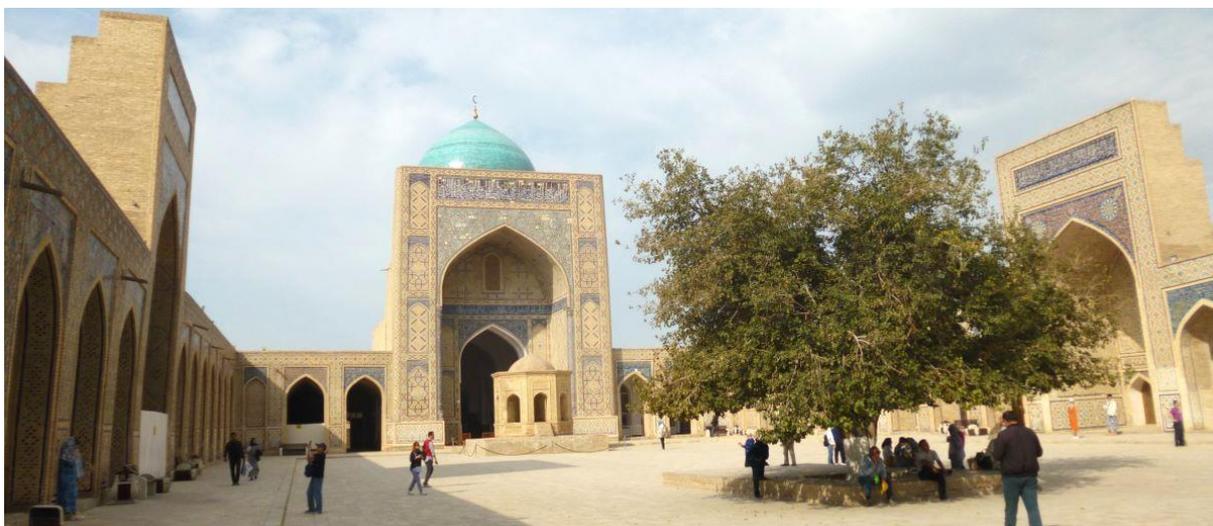


【昼間のミルアラブメドレセ】

昨夜は入れなかったカランモスクに入る。

庭の真ん中の木があり、写真を撮るには邪魔だが、夏は40℃を超える暑さを考えれば、この木の効能は写真を犠牲にしても仕方ないだろう。

何故か、八角堂がある。仏教では八角堂は故人の供養のためのものだが、イスラム教では預言者から言葉を聴く場所だと、ナルさんが教えてくれる。



【カランモスクの中庭 中央に木があって、奥に八角堂】

■買い物

バザールで買い物をする。バスの中でナルさんが説明していたように輸出しているドライフルーツを中心に、各種食料品が売られている。

そしてここで圧倒的な女性パワーを見ることになる。

今回のツアー客は14人、内訳は1人参加の男性が4人、残りは女性の2人組と4組の夫婦で、女性は6人ということになる。この6人が徒党を組んで買い物をしている。

あの夫婦もあちらの夫婦も、旦那たちは奥方の買い物をただただ見守っている。もちろん山さんの夫婦も例外ではない。山奥さんがウズベキスタンに執着した理由が分かる気がする。

テレビ番組「旅サラダ」で、俳優で世界遺産検定マイスターの南圭介がコウノトリの形をしたハサミを売っていると紹介した店にやってくる。

ここでも女性陣が猛烈な勢いで価格交渉をして、その結果ハサミは20USドルになった。私も買って、孫子の代まで使えるようにと“UEKI”と彫ってもらった。



【コウノトリのハサミ】

実は昨日行った彫金屋でも同様なハサミを売っていたが、真鍮製なので価格は5USドルだった。そのことを値引き交渉のために伝えると、こちらはステンレス製だから高いのは当たり前だと、店の人は自信満々に言っている。

私には真鍮かステンレスかどちらが良いか分からないが、自信に満ちた顔で言われると信じてしまうのが人間だ。はて、こんなシーンは今回どこかであった気がする。そう、モンゴルの初日の出ツアーを教えてくれたおばさんだ。おかげで45mのミナレットに登ることができた。

■ボロハウズモスク

ボロハウズモスクは国王一族専用のモスクだったという。天井の様子が印象的で、それを木の柱が支えている形になっているのが何となく面白い。そのすぐ前には池があって、天気の良い日には池に映るモスクが綺麗だと聞いていたが、本日それは叶わなかった。



【ボロハウズモスク】

■ 昼食のラグマン

昼食では定番の野菜の付け合わせとスープの後に、「焼きラグマン」という“中央アジア版焼きうどん”という触れ込みの料理が出てきた。

見た目は確かに焼きうどんだが、日本の焼きうどんというよりも味付けはパスタに近い。

それよりもラグマンという名前はラーメンの語源とも言われているから面白い。

パスタ、うどん、ラーメン、これも東西文化の融合かもしれない。



【焼きラグマン】

■ ゾロアスター教

ウズベキスタンの宗教について、街歩きをしながらナルさんに聞いてみた。

現在のウズベキスタンではイスラム教がほとんどだが、イスラム教は8世紀に入ってきたので、それ以前はゾロアスター教だった。当時のペルシャの国教はゾロアスター教だったから、やはりペルシャの影響力が強かったのだろう。

ゾロアスター教は拝火教とも呼ばれる世界最古の宗教で、死者の肉を鳥に食べさせる“鳥葬”の習わしがある。私もイランに行った時に鳥葬の塔を見てきたことを思い出した。

■ 高速鉄道

ブハラ駅から高速鉄道に乗り、次の目的地サマルカンドに向かう。

高速鉄道は日本の新幹線が世界で初めて営業運転を開始し、フランスのTGVやスペインのAVEなどが続いた。私はどれも乗ったことがあるが、新幹線は綺麗、TGVはお洒落、そしてAVEは朴訥（ぼくとつ）としていて頑丈そうだった。

ウズベキスタンの高速鉄道はスペインの支援で出来たのでAVEに似て、堅牢な感じがする。



【ウズベキスタンの高速鉄道】

山さんと一緒にビールを買い込み、高速鉄道に乗りこむ。イスラム圏の国だからさすがにビールを持ち込む人はいないようで、何となく後ろめたさを感じてビールを黒いビニール袋に入れてさりげなく席に着く。

ビールを飲んでいると線路の継ぎ目のガタンゴトンの振動が大きく、日本の新幹線はおろか在来線に比べても乗り心地はあまり良くない。

ウズベキスタンの鉄道は、線路幅が日本の新幹線や欧米で使用されている標準軌の1435mmではなく、それよりも広い1520mmの広軌を使用している。それゆえもっと乗り心地が良いと思っていたが、広い線路幅は横揺れを防いでも振動は関係ないらしい。単に広いが古い軌道に新しい高速車両を走らせただけという感じだ。

それでも車窓を見ながら飲む冷えたビールは最高に美味しい。

車窓は街並みから砂漠に変わり、しばらく砂漠が続く。そして荒地になり、畑になって、再び街に変わる。電車に乗ってから約1時間半、サマルカンドに入ってきたようだ。

第四章 サマルカンド (Samarqand)

■サマルカンド駅

サマルカンド駅に到着する。日本のように列車の出入口とホームが同じ高さになっていないので、大きな荷物を持った人は乗降に時間がかかり、ホームは人でごった返している。

サマルカンドはブハラと首都タシケントの中間地点にあり乗降客が多い。人口56万人でウズベキスタンでは2番目、ブハラの2倍になる。古都で、日本で例えれば京都のような都市だろう。

街に出ると、車も多く、喧騒の世界といったところだ。それでもインドや東南アジアとはだいぶ異なり、落ち着きがある。



【サマルカンド駅のホーム】



【サマルカンドの街中】

■夕食

夕食ではいつもの定番セットのスープとして「ボルシチ」が出てきた。

ボルシチは赤カブに似ている野菜ビーツを使用して作られる赤いスープで、言わずと知れた世界三大スープのひとつになる。ウクライナ発祥で、シルクロードでこの地に伝ったのだろう。

ちなみに三大スープの残りはフカヒレスープ、トムヤンクン、ブイヤベースだという。あれ、ボルシチを入れると4つになってしまう。物の本によれば3つに絞り切れないらしい。

山さんと一緒に赤ワインをボトルで注文する。私と山さんは、美人添乗員に「ワインの味も職務上必要な情報ですよ」などと言いながら勧める。いかにも中年オヤジのやりそうなことだが、彼女もワインが好きらしくまんざらでもなさそうだ。

■サマルカンドのホテル

本日から3連泊するホテル「MAROQANDA (マロカンド)」に到着する。このホテル名はサマルカンドの旧名称だという。

このホテルは、今回のツアーで最もグレードが低いホテルだと聞いていたが、大型バスが入れない路地りにあって、“場末の古い宿”という感じがする。

一般的に海外ツアーでは最後に泊まるホテルのグレードを最も高くするようにしており、最後の晚餐も豪華なものが出てくるが、今回はそうではないのだろうか。



【ホテル MAROQANDA】

それでもホテルの内部は改修を繰り返してエアコンや冷蔵庫、オートロックのドアなど設備はひと通りそろっている。シャワーのお湯の出方は今まで泊まってきたホテルでは一番良い。

それらのホテル同様に、このホテルにも部屋の天井の片隅に矢印がある。その矢印は1日5回というイスラム教の礼拝をするためにサウジアラビアのメッカの方向を指している。

そういえば、ウズベキスタンに来る飛行機の中でも、乗客の何人かがイスラム教の礼拝をしている光景を目にした。礼拝はモスクだけで行うものではないということを実感する。

■世界遺産サマルカンド

サマルカンド観光の1日が始まる。“青の都”と呼ばれるサマルカンドは2001年に世界遺産に登録された。その登録名称は「Samarkand - Crossroad of Cultures」で、日本語では「文化交差点サマルカンド」と訳されている。

世界遺産の登録名称は一般的には「〇〇の歴史地区」や、「古都〇〇」などという表現が使われるが、文化交差点という都市が果たした役割を用いた名称は珍しい。それほどにサマルカンドは文化交流に貢献した街だと強調したかったのだろう。

人々が集う豊かな(サマル)街(カンド)という意味のサマルカンドの歴史は古く、紀元前から栄え、アレクサンダー大王もその美しさを絶賛した。8世紀にイスラム教化され、13世紀にモンゴルに破壊され、14世紀にティムール朝によって再興された。その時に青いタイルを大量に使ったのでサマルカンドブルーと呼ばれる青の都になった。

サマルカンドは中央アジア一帯を支配したティムール朝の首都だったから、その支配力の強大さと華やかさを誇示すべく、数多くの建築物を残した。

■レギスタン広場

サマルカンド観光の拠点は何といても街の中心にある「レギスタン広場」だろう。

実は私たちが泊まっているホテルは、この広場まで歩いて10分という便利な場所にある。その10分間も単なる街中の道を歩くのではなく、車の侵入を制限した綺麗な並木道になっている。古いホテルだが由緒あるホテルらしく街の中心にあり、意外に良いホテルだと改めて感心し、グレードが低いなどと言ったことを少し反省する。

レギスタン広場にやって来る。ツアー客の誰もが感動して「オオー！」と声を発し、そして写真を撮りまくる。今まで見てきたモスクや廟とはスケールが桁違いで、素晴らしいという言葉に尽きる。

広場にはメドレセ（神学校）が3棟あって、中央が広い広場になっている。メドレセは左側からウルグ・ベク・メドレセ、中央にティリヤー・コリーモスク・メドレセ、右側にシェル・ドル・メドレセが建っている。



【左側のウルグ・ベク・メドレセ】



【右側のシェル・ドル・メドレセ】



【中央のティリヤー・コリーモスク・メドレセ】

広場は夜に来るとライトアップされ、これがまた素晴らしい。音楽とともに照明が赤や青や黄色に変わる「光と音のショー」が催される。

このショーはテレビやインターネットでも紹介されるが、この音楽の再現は無理だろう。その理由は広場の周辺に設置されている大音量の低音スピーカーから発せられる振動が、空気だけで

なく地面を伝わってくるので足元から音楽を感じることになる。この臨場感は現地に来た人だけが味わえる特権だろう。



【レジスタン広場の夜の光と音のショー】

■クーリアミール廟

クーリアミール廟にやって来る。青いドームを中心に外観の青に対して、内部は金がふんだんに使われている。その青と金の調和が見事な廟になっている。

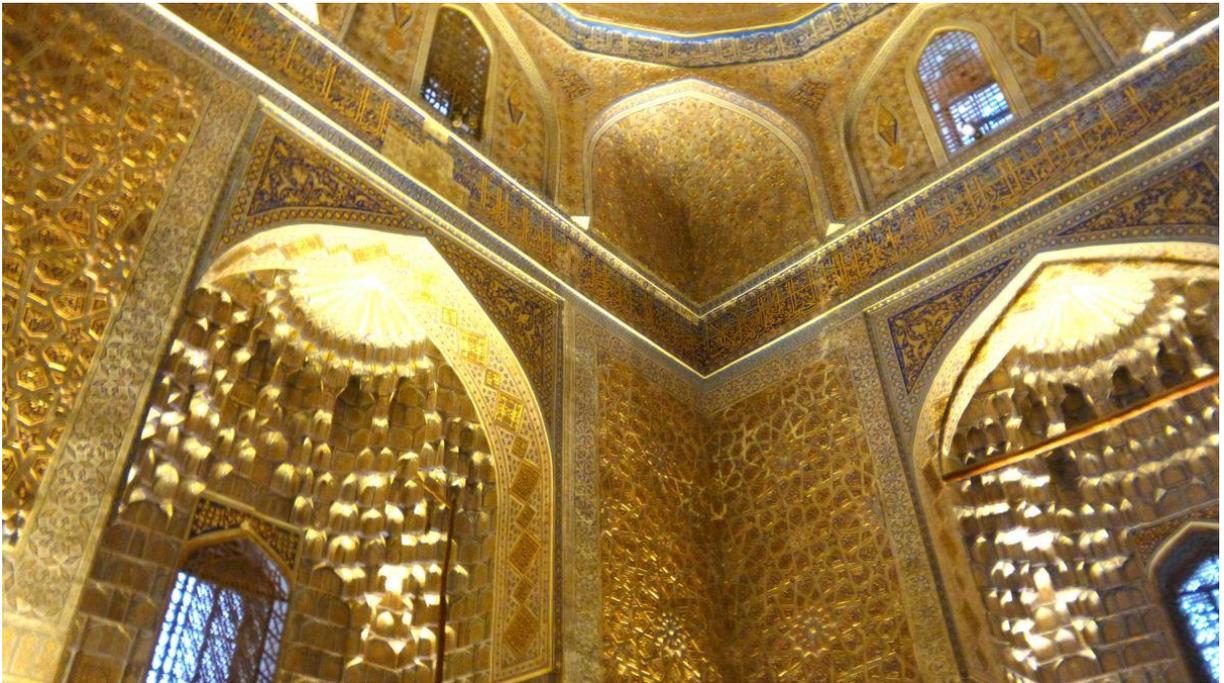
クーリアミールとはペルシャ語で「王の墓」を意味しており、ペルシャを身近な存在に感じる。王の墓なのでティムールとその息子や孫たちが眠っている。同じ廟の中にいくつもの墓石が置かれているのは比較的珍しい。



【クーリアミール廟外観】



【廟の内部の一族の墓石】



【クーリアミール廟の黄金の内装】

■料理が交差する

昼食は野菜とスープの定番セットに続いてウズベキスタン料理「プロフ」が出てきた。ナルさんはピラフの元になった炊き込みご飯だと紹介してくれる。

調べてみると、フランス料理「ピラフ」のルーツはトルコの実験料理「ピラウ」で、ウズベキスタンのプロフもその仲間らしい。確かにピラウとプロフを合わせるとピラフになる。

味付けについては、むしろ中華料理のチャーハンと言った方がいい。チャーハンは“炒飯”なので炊き込みではないが、塩コショウの素朴な味に仕上がっている。

ここでも文化交差路を感じることになる。

夕食も定番セットに続いて、ウズベキスタン料理「マントゥ」が出てくる。確かトルコ料理にも同様なものがあったと思うが、どちらが発祥なのかは早く言ったもの勝ちかもしれない。

しかしどう見ても小籠包のようで、中華料理と言った方がいい。ただしここはイスラム圏なので豚肉でなく牛肉を使っている。

そもそもマントゥは饅頭からきているような気がする。饅頭は日本では“まんじゅう”だが、中国では“まんとう”で、肉まんに似ている。饅頭が西へ伝わったのか、マントゥが東に伝わったか、これが文化交差点たるこの土地の面白いところだろう。



【プロフ】



【マントゥ】

世界三大料理とは、中華料理、トルコ料理、フランス料理を言うが、ここウズベキスタンではそれらがまさに交差している。ただし私が感じたのは、交差しただけで融合することはあっても進化や発生はしていない。

■ワイン

夕食の時、山さんと私そして同じツアーの男性1人も加わり、ワインをボトルで注文する。彼は「このワインは美味いはず」と自信をもって勧めてくる。その自信たっぷりの表情に私は弱くて、結局赤白ワイン1本ずつ注文する。飲んでみると実に美味い。そしてこのワインはサマルカンドで造っているというから驚きだ。

そういえばバザールでもブドウをたくさん売っており、荷台いっぱいにブドウを積んだトラックを街中で何台も見た。彼のあの自信はあの光景を見たからだろう。

■ビビハンムモスク

「ビビハンムモスク」はティムールの第一婦人の名前だが、もはやこれが何モスクとか、誰の廟だとか、よくわからないほど同じようなものを見てきた。それでもこのモスクの特徴は中庭の大理石でできた大きな本（コーラン）スタンドだ。

しかしこのモスクは修復していない部分が多く、横に回るとそこが見えるところが面白い。



【ビビハンムモスクの横の修復前に部分】

■ジョブバザール

ビビハンムモスクのすぐ隣にジョブバザールがある。ブハラのパザールに比べると大きくて整然としている。青果、食料品、陶磁器、衣類、土産物など何でも売っている。

ここでも女性陣の買い物攻勢が始まる。一人ひとりには少しだが、全体では多く購入することになるという手口で、店舗を絞って集団価格交渉をすると、あっという間に半額くらいになる。

店の人は嬉しさか、恐ろしさかどちらかわからないが、悲鳴をあげている。

■シャーヒズィンダ廟群

「シャーヒズィンダ廟群」にやって来る。この廟群は11世紀頃から19世紀までの間に作られて、現在では20以上の廟の集合体になっている。

ナルさんはこの廟群についても色々説明してくれるが、私は正直あまり覚えていない。

廟群は高台にあるので、階段を登らないといけない。階段を登りながら段数を数え、帰りも降りながら数えて、その数えた段数が登り降りでも一致していたら、天国にいけるといふ言い伝えがあるという。ツアー客たちは、そして私も数えながら登る。



【シャーヒズィンダ廟群に登る階段】

登り終わると狭いながらもメインストリートがあって、多くの人たちでごった返している。

両側には多くの廟がある。中に入ると、墓石だけポツンとあるものや綺麗な装飾が施されているものもあるから、ここに来れば各時代の様々な廟を体験できる。



【シャーヒズィンダ廟群の通路】



【ある廟の内部】

その階段の上で日本人親子に出会う。年の頃なら 30 代前半の母親と幼い男の子で、何と 2 人で世界一周旅行中だという。

来年の春に男の子が小学校に入るので、その前の 1 年間を使って世界一周の飛行機チケットで旅行している。既に 200 日以上世界を回ってきており、これから日本に近づいて行くと言っている。

女性の 1 人旅でも大変なのに幼い子供を連れており、それも行き当たりばったりの個人旅行だからとても信じられない。言葉は日本語と英語しかわからず、それ以外は全てスマホの翻訳でこなしているというから凄い。

子供の父親つまり旦那のことを訊ねると、日本で仕事をしており、年末年始にベトナム辺りで合流すると言っている。

実は私はその世界一周チケットを使って世界一周旅行をしようと計画しており、驚きと同時に敗北感のようなものを感じてしまった。やはり若さにはかなわないか。

登ってきた階段を数えながら降りると、登った時と数が一致して 36 段になる。

天国には行けそうだが、私は若さと行動力が欲しい。

第五章 タジキスタン (Tajikistan)

■タジキスタンへ入国

サマルカンドから隣国のタジキスタンの国境まで 65km しかない。従ってツアーの行程表では日帰りで行くことになっている。

私たちは国境までは大型バスで移動し、バスを残して歩いて国境を越える。

出国審査には担当官が 1 人しかおらず、30 分程並ぶ。すると地元のおばさんたちが横入りをしてくる。事前にナルさんからその横入りの情報を聞いていたが、おばさんたちの巧みさに騙されて何人かを入れてしまう。それでも急ぐ旅でもないから皆笑っている。



【ウズベキスタン側の国境検問所】

出国審査は質疑応答もなく 1~2 分で終わる。ウズベキスタンの出国で 2 回パスポート提示があり、タジキスタンの入国でも 2 回ある。最初だけ 30 分並んだが、あとは比較的スムーズに進み、約 1 時間で出入国が終わる。

タジキスタンに入国すると現地ガイドとマイクロバスが待っていた。現地ガイドは日本語を話せないで、ナルさんが日本語に通訳してくれる。

私はナルさんに「ウズベキスタン語はタジキスタンでは通じないのですか？」と聞くと、彼女は「全く別の言葉ですから通じません」と言っている。隣国ならば通じそうなものだが、そうではないらしい。日本語と韓国語が全く通じないのと同じかもしれない。

タジキスタンの人口は 1 千万人、国土の 93%が山岳地帯という説明をきいて皆は驚いている。しかし日本も 80%が山なのでそうは変わらない。ただ日本の山は緑が多く水をたくさん含んでいるが、こちらは灰色で水も木もない。標高 7 千 m 級なので、日本とは全く異なる。

■原始都市遺跡

世界遺産「サラズム：原始都市遺跡」にやって来る。

この遺跡は紀元前 3~4 千年のもので、間をとると約 5500 年前になる。そのため入口には 5500 の文字が大きく刻まれており、2010 年にタジキスタンで初めて世界遺産に登録された。

遺跡の年代は日本の縄文時代に相当する。縄文時代は石器から土器になり定住化が始まり堅穴住居と集落が形成された。その後の弥生時代になると稲作と金属器文化に移行する。

この遺跡も同様で、定住化による住居跡がある。

ただし遺跡は遺構のみで、住居として復元されていない。そのため遺構の上に大きな屋根を付けて、雨や日射しから遺構を守っている。



【サラズムの原始都市遺跡】

近くにある博物館には出土したものが保管・展示されている。20代男女と子供の骨が出土しており、女性はブレスレットや装飾品を身につけているから高貴な人だったらしく、サラズムの王妃と名付けられている。

その装飾品からすると日本の縄文時代よりも進化しており弥生時代に近い。4大文明が交差する場所だから極東の島国よりも進んでいたのだろう。



【20代男女と子供の骨】

■泥の遺跡

「ペンジケント遺跡」という日干レンガで造った集落跡にやって来る。日干しレンガの遺跡で屋根もないので長い年月の風雨や日射しによって泥の遺跡と化している。

23日間ツアーの人が言っていた「泥の遺跡ばかりだった」という言葉を思い出す。

遺跡は少し高台にあり、眼下に街と川があつて、その向こうに高い山が見える。ツアー客たちは、遺跡よりもその景色の写真をたくさん撮っている。



【ペンジケント遺跡】



【ペンジケント遺跡から見た街と山】

■バザール

ペンジケントにもバザールがあり、地元民で賑わっている。野菜に果物などの食料品、日用品が山のように売られている。現地ガイドの顔なじみの店に案内されると、また女性陣の値切り爆買い攻撃が始まる。

タジキスタンは発展途上で観光客も少ない。そのため日本語も英語も通じない。それでも値引き交渉して買えるだから、ここも文化交差点なのだろう。



【バザール入口】



【女性陣の買い物風景】

第六章 タシケント (Toshkent)

■首都タシケント

ウズベキスタンの首都タシケントは人口約 300 万人の大都会だ。ソ連時代はモスクワ、レニングラード（現サンクトペテルブルク）、ウクライナのキエフ（現在はウクライナ語のキーウ）に続く第 4 の都市だった。そのためソ連時代の古い建物も多く残っている。

しかしソ連崩壊から 30 年以上経っているので新しい街に進化もしている。道路にある広告はデジタルサイネージ（大型テレビジョンの電子公告）がほとんどで、道幅もかなり広い。街を歩く人々も何となくお洒落に感じられる。

ただ自動車については、ウズベキスタンの他の地域同様にアメリカの GM（ゼネラルモーターズ）製のシボレーばかりが走っている。

その理由は、ウズベキスタン政府が国内に GM と合弁会社を設立して、国内生産をしているので国産車扱いになるために高い関税がかからない。そのため価格が安く、多く販売されている。

■牛串

昼食に「シャシリク」という串焼きが出てきた。牛肉を串に刺して焼いたもので、日本では牛串だが、肉の間に玉ネギがあるのかと思って食べたら脂肉だった。

さらにひき肉を固めたものも出てきた。こちらはつくね串といったところだろう。どちらも塩コショウの味付けで、なかなか美味い。



【シャシリク】

■バスの中の話

ナルさんがウズベキスタンについてのクイズを出してきた。10問のクイズで、正解率の高い人には景品が渡された。国内のツアーでよくあることだが、海外では初体験でなかなか面白い。

そしてもっと面白い話をしてくれたのは添乗員で、それはもはや面白いを通り越して驚愕の話になっている。

彼女の夫はカメルーン人でプロの総合格闘家をしている。そして妻である添乗員はマネージャー兼セコンドもしており、試合の時は実際にリングサイドに立っているという。彼女は「セコンドまでやっている添乗員は私だけでしょうね」と言っている。すると誰かが、「添乗員でなくてもセコンドやる女性はいませんよ」とチャチャを入れると、彼女は「セコンドは一度やったらやめられませんね」と笑っている。

その他に彼女は英語力を活かしてサッカーの国際審判員の世話人もやっているというから、添乗員が副業をしているのではなく、添乗員を副業にしていると言った方がいいかもしれない。

よく考えると、この添乗員も文化の交差点のような仕事をしている。

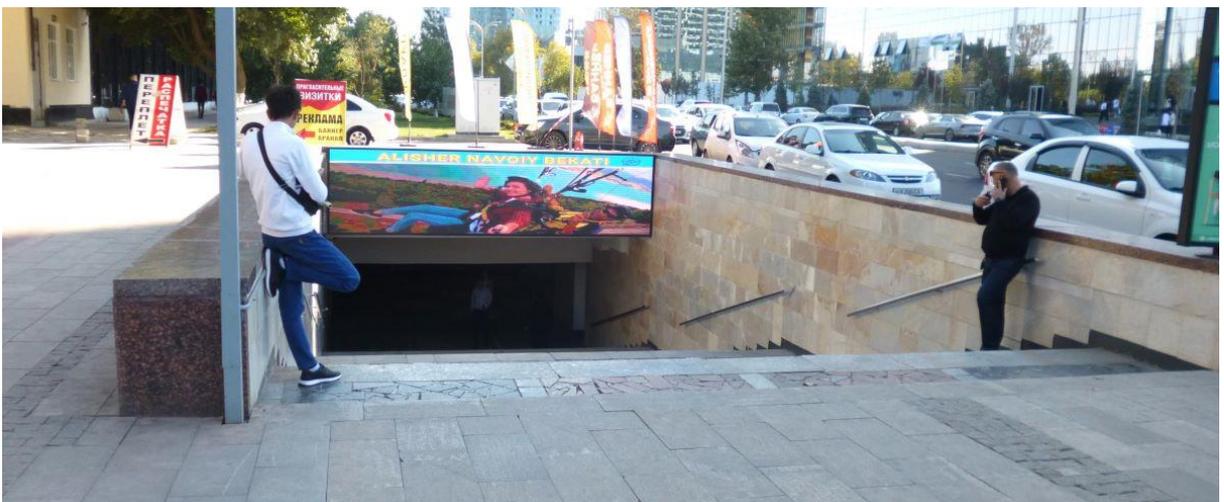
■地下鉄

テレビ番組「旅サラダ」で紹介されたのはコウノトリのハサミだけでなく、タシケントの地下鉄も紹介された。

タシケントの地下鉄は中央アジアで最初の地下鉄で、ソ連時代の1977年に開業した。世界の地下鉄の中でもかなり凝った装飾がなされていることで有名だ。

ナルさんの話では、かつて地下鉄構内は撮影禁止だったが、2018年から撮影が可能になったという。ウクライナのキーウの地下鉄もそうだが、西欧や米国との戦争を意識して作っているので、機密事項が多かったようだ。

地下鉄駅への入口は広いが分かりにくい。おそらくそれも軍事利用を意識しているのだろう。それでも入口には後付けのデジタルサイネージがある。



【地下鉄の入口 デジタルサイネージがある】

乗車券は窓口で買うことになるが、1 区間 2000 スムつまり 23 円だからとんでもなく安く感じられる。それでも年収が日本人の 1/10 程度だとすると、それほどでもないか。

地下鉄のホームは私が思っていたよりも深くない。これでは核シェルターにはならないかもしれない。構内の装飾は綺麗で芸術的だが、これも私の想像よりも地味だった。やはり過度な期待をしてはいけない。



【地下鉄の駅のホーム】

地下鉄に乗ると、すぐに若者が席を譲ってくれた。ウズベキスタンの若者たちは年配者に席を譲るのは当たり前だと聞いていたので驚かなかったが、電車内でスマホばかり見ている日本の若者にも見てほしいと誰かが言っていた。

線路の幅は 1524 mm のロシア軌道になっている。高速鉄道の 1520mm と微妙に異なるので乗り入れは出来ないだろう。全ては国家統制で造られたはずの社会主義国だったのに、妙なところで統制がとれていない。そんなことだから崩壊したのだろうか。

■日本人墓地

第二次世界大戦の直後、満洲や樺太に駐留していた日本兵が捕虜になってソ連に連行されて、過酷な労働を強いられた。いわゆる抑留者たちで、彼らは国家がすべき賠償の代わりに働かされた。

実は私の父もシベリア抑留者で、私が幼い頃にはその過酷な労働の話聞いたことがある。

そんな抑留者たちがウズベキスタンに 2 万人以上移送され、800 人以上が亡くなった。その抑留者たちの墓が公営墓地の一角にある。

私たちは抑留者たちが眠る墓前で手を合わせて冥福を祈る。

同じ敷地にウズベキスタン人やロシア人の眠る公営墓地もある。ロシア人の墓は、ロシアの風習で墓石に亡くなった人の顔や姿が彫られている。ツアー客たちは初めて見る墓のスタイルにカルチャーショックを受けている。



【日本人抑留者の墓地】



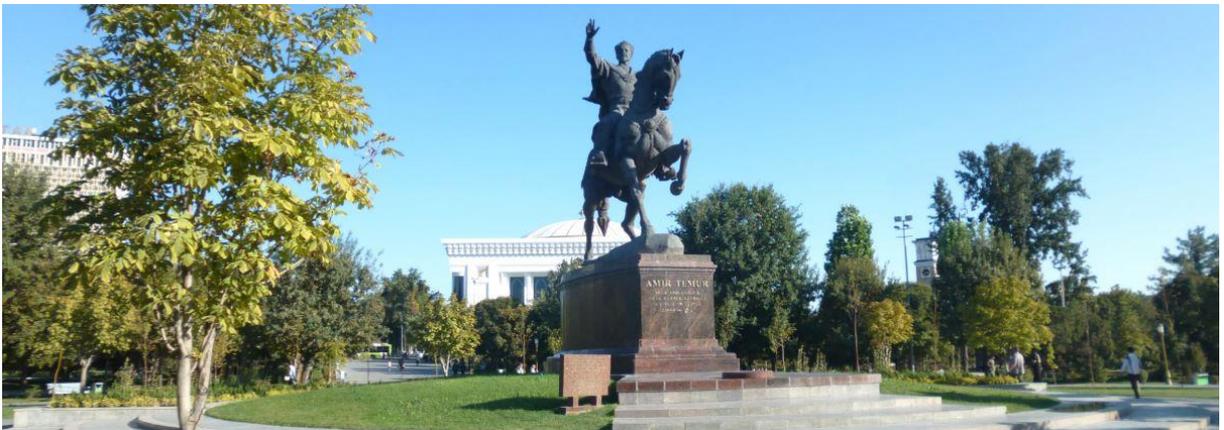
【ロシア人の墓地】

■アミール・ティムール広場とナヴォーイ劇場

「アミール・ティムール広場」という街中の大きな公園にやって来る。緑豊かな公園といった印象がするが、この公園も歴史がある。

19世紀にロシア帝国がこの地域を攻撃して支配下に置いた。その総督の像がこの公園に置かれて、提督の名をとってコンスタンティノフ広場と呼ばれていた。ロシア革命後のソ連時代は革命広場と呼ばれてレーニン像やマルクス像が置かれていた。今はティムール帝国の英雄ティムールの像が置かれている。

このような変遷は、日本ではまず考えられないことだ。



【アミール・ティムール広場のティムールの像】

広場の隣にある「ナヴォーイ劇場」にやって来る。

建物側にプレートがあって日本語で何か書かれている。「1945年から1946年にかけて極東から移送された数百名の日本国民がこのアリッシュェル・ナヴォーイ名称劇場の建設に参加し、その完成に貢献した」とある。つまり抑留者が作った劇場ということになる。

するとウズベキスタンが大好きな山奥さんが、「その後のタシケント大地震で、街は壊滅的被害を受けたけど、この劇場は壊れることなくむしろ避難場所として利用されたそうよ。それで日本人への信頼が高まって、あの日本人墓地の整備に繋がったみたい」と言っている。

そんなことを知っている彼女にも驚くが、何よりも抑留者の苦勞が報われたのが嬉しい。

今でもこの国では日本人への感謝の思いが継続しているようで、今回のツアーで実感することができた。先人たちへは感謝しかない。



【ナヴォーイ劇場】

■ハプニング

タシケント郊外の道路で、バスがカーブを曲がろうとして「ザザザザー、ザー」と、けたたましい音がした。そしてすぐにバスは急停車した。

何かが起こったようだ。

パンクでもしたのかと思ったが、そうでもない。よく見るとバスの横腹にあるトランクルームの扉が開いていてスーツケースが道路に飛び出て散乱している。

運転手が慌ててバスを降りて回収に向かっている。ツアー客たちも外に出て手伝おうとするが、添乗員が「危ないから、お客様はバスを降りないでください」と制止して、運転手に続いてガイド、そして添乗員が奔走してスーツケースを回収する。

偶然通りかかった車の運転手たちもそれを手伝ってくれている。これも地下鉄の若者たちの席譲りと同様で、この国の国民の親切心が感じられる。



【スーツケースが散乱した道路 大きくカーブしている】

その一方では、バスの車内のツアー客たちは「スーツケースの保証はどうなる？」「中身は大丈夫か？」などと自分のことばかり考えている。

スーツケースを全て回収してバスが発車する。それにしても後続車がスーツケースを踏まなくて助かった。踏んでいれば事故になっていたかもしれない。少なくともスーツケースは潰れて中身はぐちゃぐちゃになっていた。

夕食の時、添乗員は「スーツケースは会社として補償しますから、帰国後に文書で連絡します。お詫びの印に、この夕食の飲み物は会社が全額負担いたします」と言っている。

誰かが「ごっつぁんで一す、乾杯！」と音頭を取って最後の晚餐が始まる。

■帰国後すぐに

帰国後すぐに、旅行会社からお詫びの文書が届く。

スーツケースは弁償するとのことだが、一般の飛行機での破損と同じ扱いだという。つまり壊れた部分の修理には見積書か領収書が必要で、破損して買い替えたい場合は破損したスーツケースを買った時の領収書が必要になり、3年以上経過のものは全額保証できないらしい。

原因について、悪路走行中に振動でトランクルームの扉が開いたと書かれていた。

しかし実際は、悪路ではなく綺麗に舗装された道路のカーブで発生している。運転手はスーツケースを入れる時に入れ易いようにキャスターを下にして転がして縦に置いていた。これは私もツアー客の何人かも目撃している。そのためにカーブを曲がる遠心力でスーツケースが横に移動して、トランクルームの扉に激しく当たってロックが外れて飛び出たという推測するのが妥当だ。つまり悪路という外部要因ではなく、明らかに安易な作業つまり怠慢で発生した。

トランクルームの扉のロックが外れるとは、運転手にとっては全くの想定外だっただろう。だが事故とは想定外のことが起こるから発生する。だから2重3重で想定外の対策をする。

そのいい例が、日本に帰国して成田空港からリムジンバスに乗った時、スーツケースが動かないように横置きして、さらに上から頑丈な網をかけていた。これが日本品質というものだろう。

以上のことを私は写真付きレポートにまとめて旅行会社に送った。一緒に行ったツアー客とも連絡をとって、旅行会社に対してもう少し誠意ある対応を“さりげなく”お願いした。

■帰国後1カ月

帰国後1カ月、旅行会社から2万円が振り込まれる。私はスーツケースの破損届を出していないから、旅行会社の誠意であろう。

それにしても1カ月かかった理由が分からない。当初は原因を悪路にして決着させようと安易に考えていたようだが、私のレポートによりそれが否定され、社内で問題になったのだろう。

やはり安易な対応はろくなことにならない。スーツケースの散乱も、その後の対応もしかりだ。

そしてこの時、私はヒヴァのホテルのカートを思い出した。12人乗りに16人乗ってホテルへ戻ったシーンだ。あの時は柔軟な対応に感謝したが、時には柔軟つまり安易な対応は裏目に出ることがある。

第七章 旅の記録

■旅の記録

実施は2024年10月1(火)～8日(火)の7泊8日の旅の行程を示す。尚、本文での順番が以下の記述と異なる部分があるが、以下の行程が実際の行程になっている。

- ・1日目 朝6時に自宅を出て8時に成田空港着、11時ウズベキスタン航空機で成田出発、9時間のフライトで現地時間16時にタシケント空港到着、空港でバスに乗り18時30分タシケント市内のホテル「CITY PALACE」チェックイン、ホテルで夕食
- ・2日目 朝4時モーニングコール、5時にホテル出発、タシケント空港でサンドイッチ朝食7時発の国内便で1時間30分フライト、ウルゲンチ空港着、バスでヒヴァへ移動ホテル「LOKOMOTIV」チェックイン、世界遺産「ヒヴァのイチャン・カラ」観光、ジュマ・モスク、レストランで昼食、ハンの宮殿、見張り台、イスラム・ホジャのミナレットに登り、レストランで夕食(郷土料理サモサ)ライトアップした遺跡を見学し、カートでホテルへ
- ・3日目 8時にホテル出発、キジルタム砂漠を通過してブハラへ、途中のレストランで昼食世界遺産「ブハラの歴史地区」、イスマール廟、民族舞踊を見ながら夕食夜のカラーンモスク、カラーン・ミナレット、ミルアラブメドレセ見物20時「GRAND BUKHARA HOTEL」にチェックイン
- ・4日目 9時ホテル出発、ブハラ観光(ミルアラブメドレセ、カラーンモスク、アルク城、チャシュマ・アイユブ、ラビ・ハウス、カラーン・ミナレット)、レストランで昼食(郷土料理ラグマン)、ブハラ観光(ボロハウズモスク、マコギアッタリモスク、タキバザール)、ブハラ駅15時50分発の高速鉄道で17時30分サマルカンドへサマルカンド市内のレストランで夕食(ボルシチ)荷物はバスにて運び込まれており「HOTEL MAROQANDA」にチェックイン
- ・5日目 8時30分にホテル出発、バスに約1時間乗り、タジキスタン国境検問所到着、バスを置いて、徒歩にて国境越え(約1時間の出国入国審査)マイクロバス2台に分乗して、世界遺産「サラズム原始都市遺跡」見学、「ペンジケント遺跡」見学後、バザール、再度国境越えウズベキスタンに戻り「クーリアミール廟」見学、レストランで夕食(郷土料理マントウ)、

「レジスタン広場」の音と光のナイトショー、ホテルに戻り連泊

- ・ 6 日目 9時にホテルを歩いて出発、世界遺産「文化交差路サマルカンド」市内観光、「ビビハンムモスク」、「ジョブバザール」、「レジスタン広場」、レストランで昼食（郷土料理プロフ）、紙すき工房、「シャーヒズィンダ廟群」、17時ホテル着、ホテルで夕食（ロールキャベツ）、ホテル連泊
- ・ 7 日目 8時にホテル出発、バスでタシケントまで約 5 時間の移動、途中のレストランで昼食（郷土料理シャシリク）、カーブでバスのトランクルームが開いてスーツケースが道路に飛び出て散乱、日本人墓地、地下鉄に乗ってティムール広場、ナヴォーイ劇場を徒歩見物 レストランで夕食、22 時タシケント空港よりウズベキスタン航空で成田空港へ
- ・ 8 日目 7 時間のフライトで日本時間の朝 10 時に成田空港着、13 時に帰宅

総額は約 48 万円になった。ツアー料金は約 36 万円だったが、その他の費用がかかり旅行会社への支払いは約 46 万円になった。尚、スーツケース事故のお詫びの印として 2 万円をマイナス計上した。

- ・ 阪急交通社への払い込み 476888 円だが、20000 円を相殺して 456888 円になった。

| | |
|-------------|----------|
| 基本旅費 | 359900 円 |
| 1 人部屋追加料金 | 50000 円 |
| 燃油サーチャージ | 52330 円 |
| 各種税金や手数料など | 14658 円 |
| スーツケース事故お詫び | －20000 円 |

- ・ 国内交通費 約 8000 円
- ・ 現地の飲み物と土産物 約 15000 円